

# 「吾輩は猫である」冒頭文にみられる

## 作家漱石の発想

山 本 勝 正

ばしば論じられていることから明らかなである。それに比して、初期の作品の冒頭文は、たいした意味づけがなされていないのが現状のようである。私は、漱石が中期や後期の作品のように意識的に計算して始めたかどうかは問題があるにしても、「猫」の冒頭文の中にはかなりの深い意味が読みとれるのではないかと思う。

「猫」は次の如く始まる。

漱石の処女作「吾輩は猫である」（以下「猫」と略称）の冒頭文の中に、私は夏目漱石の作家的発想の一つの原点をみようとするのである。一人の作家にとって処女作の持つ意味は大きいし、また一つの作品にとって冒頭文の持つ意味は大きい。漱石という作家の、作家的自覚に多少の問題はあるにしても、初めて書いた小説の、その冒頭文の意味を問うことは、彼にとって、小説とは、小説を書くということは何であるのかということを考える上で大きな意味を持っているだろう。

漱石の冒頭文たとえば、人口に膾炙している、初期の「坊っちゃん」や「草枕」の冒頭文と、中期から後期にかけての「三四郎」「それから」「門」「こゝろ」「道草」「明暗」等の冒頭文とには質的差異があることは間違いない。漱石が、中期から後期にかけての作品の冒頭文に対してかなり意識的であったことは、従来の漱石論において、それらの作品の冒頭文が、重要な意味を持つものとして、し

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたか頼と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめ／＼した所でニャー／＼泣いて居た事又は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中で一番癡悪な種族であつたさうだ。（一）

このような形で始まる作品「猫」は、一見ふざけた口調で、ユーモアたっぷり、自由奔放に書き始められているようである。そして漱石も「猫」上篇序の中で「此書は趣向もなく構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章」と述べている。しかし、かりにこの冒頭文の猫を、幼少年期における漱石、金之助とおきかえた時、この冒頭文の中には、夏目漱石、金之助自身の幼少年期の不幸な生活が

物語られているといえよう。しかもこのような事實は、「猫」以後の漱石の文学を考える上で、重要な意味を持つてくるのである。

「猫」という作品の一つの大きな特色は、猫が主人公であり、猫が人間社会を批評するところにあるといえよう。どうして漱石の心の中に、猫が生まれたのか。その事に関しては、ホフマンの「牡猫ムルの人生観」、スターンの「トリストラム・シャンデイ」、スウィフトの「ガリヴァ旅行記」等との関連において、しばしば論じられてきたのである。作品「猫」における猫登場には、これらの外国文学、とりわけ、漱石は直接読んでいないにしても、「牡猫ムルの人生観」の影響は否定できないのであろうが、それのみで片付くことではない。たとえば荒正人氏は、

猫を探偵の変型とみなすこともできる。漱石には、一種の追跡症があったが、探偵を嫌う心理を裏返しにすれば、意識下の領域では、自分も姿を変えて探偵になりたいという願望を指摘しなければなるまい。<sup>注(1)</sup>

と述べられ、また

「猫」の存在自体が、探偵の昇華したものだと考えられる。<sup>注(2)</sup>

とも述べられている。このようなことは、作品「猫」における、猫の登場という事実には、単なる外国の文学作品の影響というより、漱石の意識下における、深い内的共感性があるということを示しているといえよう。そしてそのような深い内的共感性によって、作品に登場した一匹の猫であるなら、その猫を金之助とおきかえることも許されそうである。

先に引用した「猫」の冒頭文は、意味の上から、三つに分けられる。まず一つは、猫に名前が無いということ。二番目は、生まれた所が分からないこと、しかもその生まれた所か、もしくは生まれてまもない頃住んでいた所に対して、薄暗いじめじめしたイメージを持っているということ、三番目は、初めて出会った人間が、書生という憎悪な種族であったということの三つにである。以上の三つの事に、漱石自身の、暗い不幸な痛ましい幼少年期の生活が集約された形でぎざみこまれているといえるのである。この冒頭文に限定してではないが、作品「猫」における猫に、幼少年期の漱石、金之助の投影をみる意見がないわけではない。たとえば比較的最近に出た角川の「日本近代文学大系24『夏目漱石集1』」には、先に引用した冒頭文のすこしあとの

ふと気が付いて見ると書生は居ない。沢山居つた兄弟が一定も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。果てな何でも容子が可笑いと、のそ／＼這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藥の上から急に毎原の中へ棄てられたのである。(一)

というあたりにふれて

母親やたくさん兄弟から離されて捨てられるところ  
に、生まれて早々里子に出された漱石自身の幼時の投影をみる  
こともできよう。<sup>注(3)</sup>

と書かれている。また熊坂敦子氏は、冒頭文と、その次に引用した冒頭文周辺あたりにふれて

猫の位置は初めから不安定で、曖昧だ。歓迎せざる子として  
実家の存在を拒まれて養家先へやられ、再び歓迎せざる子とし

て実家へ戻された漱石にとって、みずからの出生の暗さにひきうつして、猫を考えるとこころがなかったとはいえない。猫の存在の不確かさは、漱石そのひとのものであり、その運命を跡づけるものであった。<sup>注4</sup>と述べておられる。

このように、冒頭文に、また冒頭文周辺に関して、漱石の幼少年期の投影をみる意見もないことはないのだが、まさに冒頭の一行から、また冒頭文に限定して深く漱石の幼少年期の投影をみようとする意見はないようなので、あえてこの論考で扱うわけである。

### 三

それではまず前述の三つの問題点の内、まず初めの、猫に名前が無いということについて考えてみたい。この作品は、一見無秩序に書かれているようであるが、それなりの秩序がないわけではない。

たとえば「名前はまだ無い」と書かれているのであるが、この主人公の猫は、正確に言えば、名前は永久に無いのである。猫の死によって終る作品の最後まで、この猫は名前をつけてもらっていない。そして一章で、この猫が、車屋の黒という猫に名前をきかれて

吾輩は猫である。名前はまだ無い。(一)

と答えたり、一章の終りで、

名前はまだつけて呉れないが、欲をいっても際限がないから生涯此教師の家で無名の猫で終る積りだ。(一一)

といったところからみても、またこの作品に登場する他の猫達には、車屋の黒、筋向うの白君、三毛子というように名前があることから考えても、漱石がこの主人公の猫の無名性ということに意

識的であったことは明白である。

そしてここで漱石はたまたま猫に名前をつけたものでは決してないということを確認しておきたい。というのは、そのことは、たとえば、彼の「猫」以後の作品からみてもいえることだからである。考えてみれば漱石という作家の作品に登場する人物には、名前をもたない人物が多いのである。水谷昭夫氏は、このような事実に関連して、

たとえば「名前はまだ無い」は、この作品の発想をはしくも語っている。漱石の作品に登場する主人公たちの多くが、実は「名前」を持たないのである。「坊っちゃん」は言わずもがな、三四郎や代助や一郎にしてもが、「名前」としては如何にもぎこちなく不自然であろう。そしてその極北に『心』がのぞめる。

私は其人を常に先生と呼んでいた。だから此所でもただ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚かる遠慮といふよりも其方が私に取って自然だからである。

このすばらしい書き出しではじまる作品『心』の登場人物たちは、すべて「名前」を持っていない。「其方が私に取って自然だからである」と「私」は言う。それが「先生」と「心」における「私」の関係を端的に示しているのである。漱石文芸において、かかる発想は必ずしも偶然ではない。<sup>注5</sup>

と述べておられる。確かにその通りであろう。氏は漱石文芸において、名前が無い人物が多いことや、ぎこちない名前を持った人物が多いことを指摘され、その極北に「こゝろ」を持ってきておられる。確かに、「こゝろ」は、漱石文芸において、名前が無い人物が

多いことで、また名前が無いことが深い意味をもつことで、漱石文芸において、名前の意味を考える上で重要な意味を持つ作品であるといえよう。このように考えていく時、漱石文芸における「名前」の持つ意味を看過することはできない。

それでは次に夏目漱石の、このような「名前」に対する、たとえば名前の無い人間の登場にみられるような一種のこだわりは、どういふところからきたのかということを考えてみたい。これは夏目漱石自身の名前の問題にかかわってくるものと考えられる。すなわち何故に金之助という名前がつけられたかということになる。彼が生れた日は、慶応三年一月五日の庚申の日であり、その日に生まれると大泥棒になるという言い伝えがあり、厄除けのためには、「金」または金偏の字を名前につけなければならなかったという。それで父直克は、金之助という名前をつけたのであるが、この命名のしかたに関しては、田中保隆氏の

この命名のしかたには、金偏の字を選択するという工夫が見られず、思いなしに投げやりな態度が感じられる。<sup>(註6)</sup>

という指摘がある。とすれば、漱石にとって、金之助という命名には、選択の余地もあったわけで、金偏でなく、直接出生の忌まわしい日を想定させる「金」という字が選ばれたこと自体、父の漱石に対する愛情のない態度が感じられるのである。この父の漱石に対する愛情のないことの原因には、彼が五男三女の末子として生まれ、しかも父母老年の出生の為「恥かきっ子」として、また当時夏目家の経済状態がよくなかったこと、五人の兄弟が健在であったこともあって、「余計者」であったことが考えられるようである。従って漱石は、自身の金之助という名前に、庚申の日という忌まわしい出

生の日を、また投げやりな金之助の命名法にみられる、父の漱石に対する冷たい態度をみていたに相違ない。

さらにまた、漱石は生まれてすぐ里子に出され、実家に帰ると、またすぐ養子に出されるのであり、その養子先の塩原で、後年の「道草」からも明らかなように、不幸な暗い生活を送るのであるが、明治五年に我國最初の戸籍が編成された時、彼は養父昌之助によって、塩原の実子として登録されてしまい、実家へ帰った明治九年以後も、明治二十一年迄、夏目という姓ではなく、塩原という姓を名乗らねばならなかったのである。彼の塩原に対する、「道草」にみられるような冷たいイメージからも、また彼が塩原という姓から、夏目という姓に戻った時の複雑ないきさつからいっても、塩原という姓であったことに対して、漱石が無関心であったなどとは思われない。このように考えていく時、漱石は金之助という名前に、塩原という姓に、彼の不幸な幼少年期を想起させる点において、強い嫌悪感を懐いていたことは確かであろう。

そのような名前に対する一種のこだわりや、嫌悪感から、いささか短絡的ではあるが、漱石は名前の無い人物や、きこえない名前をもった人物を、彼の作品の中に多く登場させているとはいえないだろうか。以上のようにみてきた時、作品「猫」の猫に名前が無いことの意味は深いのである。猫を漱石、すなわち人間とおきかえた時、人間なら誰しも名前があるわけだから、名前が無いというのは、名前を持たなくないという意味にも解釈できるであろう。もしかりにこのような言い方が許されるとすれば、名前コンプレックスとでもいえるようなものが、漱石の心の中にあったといえよう。あるいは「名前はまだ無い。」と書いた漱石は、自己の心の中に沈潜して

いる名前に対する嫌悪感からの解放を強くのぞんでいたのかもしれない。

それでは二番目の問題について考えてみたい。一つは生まれた所が分らないということであり、もう一つは生まれた所、もしくは、小さい、幼い頃住んでいた所に対して、薄暗いじめじめしたイメージを持っているということである。繰り返しになるが、漱石は生まれるとすぐ四谷の古道具屋へ（一説に源兵衛村の八百屋）に里子に出され、まもなく実家に帰るが、またすぐ塩原にやられ、やっと明治九年に実家に帰ってくるのである。漱石は、生まれた時も、里子としての生活をおくっていた時も、養子として生活をおくっていた時も、また実家へ帰ってから、決して幸福でなく、冷たくあつかわれてきた人間なのである。彼が、あたたかい家庭に生まれ、両親の愛情によって育てられた幸福な人間でなく、愛情のない、痛ましい幼少年期をすごしたことは、漱石という人間を考える上で重要な意味を持っていることは、いまさらいうまでもないことである。今、漱石の作品をとおして、その暗い不幸な幼少年期の生活をみてみたい。もちろん作品の中に描かれていることを、事実そのままとすることには多少の問題があるにしても、この場合は許されるであろう。生後まもなく里子に出された時のことを、彼は「硝子戸の中」二十九で、

私の両親は私が生れ落ちる間もなく、私を里に遣つてしまつた。其里といふのは、無論私の記憶に残つてゐる筈がないけれども、成人の後聞いてみると、何でも古道具屋の売買を渡世にしてゐた貧しい夫婦ものであつたらしい。

私は、其道具屋の我楽多と一所に、小さい笹の中に入れられ

て、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されてゐたのである。それを或晩私の姉が何かの序に其所を通り掛つた時見付けて、可哀想とでも思つたのだろう。懐へ入れて宅へ連れて来たが、私は其夜どうしても寝付かず、とう／＼一晩中泣き続けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたさうである。

と述べている。また漱石は、養父塩原での生活を、「道草」四十一で次のように表現している。ここに登場する健三が漱石で、島田が養父塩原昌之助で、お常が養母やずであることはいうまでもない。

「御前の御父さんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指さした。

「ぢや御前の御母さんは」

健三はまたお常の顔を見て、彼女を指さした。是で自分達の要求を一応満足させると、今度は同じやうな事を外の形で訊いた。

「ぢや御前の本當の御父さんと御母さんは」

健三は厭々ながら同じ答を繰返すより外に仕方なかつた。然しそれが何故だか彼等を喜ばした。彼等は顔を見合せて笑つた。

（中略）

夫婦は全力を尽して健三を彼等の専有物にしようと力めた。

また事実上健三は彼等の専有物に相違なかつた。従つて彼等から大事にされるのは、つまり彼等のために彼の自由を奪はれるのと同じ結果に陥つた。彼には既に身体の束縛があつた。然しそれよりも猶恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影響を投げた。

さらにまた漱石は、実家へ帰った時のことを、「道草」九十一で子供を沢山有つてゐた彼の父は、毫も健三に依怙る気がなかった。今に世話になろうといふ下心のないのに、金を掛けるのは一銭でも惜しかった。繋がる親子の縁で仕方なしに引き取つたやうなものの、飯を食はせる以外に、面倒を見て遣るのは、ただ損になる丈であつた。

其上肝心の本人は帰つて来ても籍は復らなかつた。いくら実家で丹精して育て上げたにした所で、いざといふ時に、又伴れて行かれれば夫迄であつた。

「食はす丈は仕方がないから食はして遣る。然し其外の事は此方ぢや構へない。先方するのが当然だ」

父の理屈は斯うであつた。

島田は又島田で自分に都合の宜い方からばかり事件の成行を觀望してゐた。

「なに実家へ預けて置きさへすれば何うにかするだろう。其内健三が一人前になつて少しでも働けるやうになつたら、其時表沙汰にしても此方へ奪還くつてしまへば夫迄だ」

健三は海にも住めなかつた。山にも居られなかつた。両方から突き返されて、両方の間をまご／＼してゐた。同時に海のもの食ひ、時には山のものにも手を出した。

実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。寧ろ物品であつた。

と表現している。以上三つの引用文で明白なように、里子に出された時も、養家で生活をおくっていた時も、実家に帰つてからも、幼少年期の漱石は苛酷に取り扱われてきたのであり、そうであれば、

生まれた所に対して分らないといつたり、幼い頃住んでいた所に対して薄暗いイメージを持ちたりするのは当然であろう。さらに付け加えていうなら、ここで漱石が「薄暗いじめ／＼した所」と表現しているのには、一つの重要な意味がある。江藤淳氏は、漱石が塩原と住んでいた頃を回想した文章である「道草」八の

島田はまた此住居以外に粗末な貸家を一軒建てた。さうして双方の家の間を通り抜けて裏へ出られるやうに三尺ほどの路を付けた。裏は野とも畠とも片のつかない湿地であつた。草を踏むとじく／＼水が出た。一番凹んだ所などは始終浅い池のやうになつてゐた。島田は追々其処へも小さな貸家を建てる積であるらしかつた。然し其企ては何時迄も実現されなかつた。

うべきものが定着されているのは明らかである。」と述べられている。江藤氏のいわゆる、金之助の存在感覚としての湿地のイメージを考えれば、ここでいう「薄暗いじめ／＼した所」という表現は、漱石にとってかりそめのものではあるまい。

最後に、初めて出会った人間が弊惡であつたことについて考えてみたい。幼少年時の漱石、金之助にとって、初めて出会った人間とは誰なのか、その人間が弊惡とするされているのであれば、父直克か、養父塩原昌之助となるだろう。漱石が父にしても、養父に対しても冷たいイメージを持っていたことは、いまさらいうまでもないことであるが、そのような父に対するイメージは、引用は省くが、たとえば「それから」「彼岸過迄」「行人」「こゝろ」「道草」等の表現となつてあらわされているし、養父に対しては、「道草」に、特に先に引用した「道草」の四十一、九十一に明白であらう。

またあるいは、養父塩原は、「門」「こころ」の叔父となつてあらわされているのかもしれない。初めて出会った人間をどちらかに限定するとすれば、「書生といふ人間中で一番寡悪な種族」の「書生」にこだわつて考えてみるに、夏目家に書生として住みこんだ事のあつた養父塩原となるであらう。漱石にとつて、初めて出会った人間が「人間中で一番寡悪」と表現されていることは痛ましいことに違ひない。従つて、初めて出会った人間が寡悪な人間であつたということの中に、養父塩原が幼い漱石の魂をいかに傷つけていったのかを知る事ができるのである。

#### 四

以上のように考察を進めてきた時、「猫」の冒頭文における三つの事、すなわち、猫に名前が無いこと、どこで生まれたか分らない、住んだ所に対して薄暗いイメージを持っていること、初めて出会った人間が寡悪であつたことは、視点をかえれば、そこに、漱石、金之助の幼少年期の不幸が集約されているといえよう。漱石が、この冒頭文に自身の幼少年期の生を重ねたことに對して、どこまで意識的であつたかは分らない。あるいは無意識であつたかもしれない。しかし、ともかく漱石という作家は、自由奔放に書かれ、笑いの横溢しているような「猫」という作品を書き始めるにあたつても、己の幼少年期の生活を、生の原点を静かにみつめながら書いていくような作家なのであり、そのような自己の存在の原点を、淵源を見失わず、しっかりと凝視するような作家であつたからこそ、後の彼の文学に豊かなみのりがみられることになるのである。もし

てまた、この冒頭文は、漱石にとつて、彼の幼少年期の暗い体験がいかに彼に深く影をおとしていたかを示すことになるうし、あるいはまた、彼の文学を理解する上に、彼の幼少年期の体験がいかに重要であるかを示すことにもなるう。作家漱石はしばしば観念的であるといわれるが、決してそうでない。この論考でも分る如く、彼は自己の踏まえた現実体験を確認することの中から、小説を書き始めていった作家なのである。

注(1) 荒 正人著「夏目漱石入門」講談社現代新書 昭和四十二年一月

一七六頁

(2) (1)に同じ。一一八頁

(3) 松村達雄・斎藤恵子注釈「日本近代文学大系24『夏目漱石集I』」角川書店 昭和四十六年四月 四七頁

(4) 熊坂敦子著「夏目漱石の研究」桜楓社 昭和四十八年三月 六頁

(5) 水谷昭夫著「漱石文芸の世界」桜楓社 昭和四十九年二月 七頁

(6) 田中保隆著「写真作家伝叢書4『夏目漱石』」明治書院 昭和四十四年十一月 七頁

(7) 江藤 淳著「漱石とその時代(第一部)」新潮社 昭和四十五年九月五九頁

#### (付記)

本稿は、昭和五十年全国大学国語国文学会秋季大会(昭和五十年十一月十六日、於立命館大学)の発表草稿に若干手を加えたものである。